



月報No126

いさ

2022年1月 9 日発行

日本基督教団 八ヶ岳教会

〒408-0205

山梨県北杜市高根町

箕輪2265-3

発行人 山本 護

編集人 露木 淳司

あっ、虹だ

牧師 山本 護

年末の大掃除で日干しされている礼拝堂の座布団。ゲイジュツやってやろう、みたいな意図や作為はなく、どなたかがただ並べたのでしょう。それを見た瞬間、不意打ちくらったように、「あっ、虹だ」。それから次々連想が浮かびました。

LGBTQの多様性を象徴するレインボーカラー、虹色は音楽に置き換えるとそのまま半音階になるのでしょうか。この半音階、古い時代でも部分的に使われていましたが、R.ワーグナーが楽劇『トリスタンとイゾルデ』で古代的な幻想を着色するかのように、次から次へ波状的に用いました。半音階の多用を音楽史に位置づければ、「code=和声進行=法規範」の支配から脱して、20世紀の複調や無調といった音楽語法にもつながります。

「半音階(chromatic)」には、「色彩」という意味もあります。規定された社会の属性に納まらないレインボーカラーの色調が半音階的に聞こえ、和声進行のような支配的な規範から脱することにおいても一致している。この色調には「寄らば大樹の陰」のような安定感はありませんが、とんでもなく多様な神の創造を生きている清らかさがあります。キリスト教会は世界中に広がっていますが、八ヶ岳教会は大樹の陰で安閑となるのではなく、イエスの孤独をそれなりに引き受け、半音階的な虹色を柔らかく横断する者でありたい。

預言者エゼキエルが幻視している奇怪な生き物。この生き物が「周囲に光を放つ様は、雨の日の雲に現われる虹のように見えた。こ



れが主の栄光の姿の有様であった(エゼキエル 1:28)」。虹色の主の栄光に圧倒されてひれ伏すエゼキエルに、主御自身が語りかける。「人の子よ、自分の足で立て、わたしはあなたに命じる(2:1)」。

するとどうだろう。「霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた(2:2)」。神的なヴィジョンを視るエゼキエルに限るまい。イエスの孤独、キリストをこの胸にただく私達も聖霊によって「自分の足」で立つことになろう。神が御自分の栄光として放つ虹色に触れて、一人ひとりがそれぞれ自分の姿で神の御前に立たされる。

日干しされていた礼拝堂の座布団をふいに見かけて、「あっ、虹だ」と直感した恵み。私達は毎主日、虹色に腰かけて礼拝を献げています。このレインボーカラー、尾髄骨から脊髄を上昇し、硬くなりかけている脳に染みわたるのでしょうか。天才ワーグナーの壮大な妄想には遥かに及びませんが、大掃除の折に起こったささやかな連想でした。Ω